豊洲市場が開場し、初めて行われたマグロの競り。移転から2カ月たっても業者からは施設への不満が出ている＝10月11日、東京都江東区で

築地→豊洲移転

東京都の築地市場が豊洲市場に移転して二カ月。築地の敷地内に荷物を残していた水産仲卸業者二社が、都から処分を受け、十二月の一カ月間、豊洲で営業できなくなった。この時期は年始に向けたかき入れ時。業者にとっては死活問題で、仲間から「あまりにも厳しい」と声が上がる。実は、この二社、豊洲移転に反対する活動をしていた。都の処分は、反対派に対する「見せしめ」ではないのか。（片山夏子）

反対活動の水産仲卸２社処分

年の瀬1ヵ月営業できず

「いらっしゃいませ、いらっしゃいませ」。毎週火曜日と土曜日の午後一時から、解体工事が進む築地市場の正門前で「お買い物ツアー」が始まる。築地で営業を続けようと目指す業者が開く、街頭での海産物の販売会だ。

築地市場をとり囲む工事用外壁の前に岩ノリ、サバの水煮、サケ西京漬けなどが並ぶ。衛生上の問題で鮮魚は扱えない。それでも、集まった四、五十人の客に次々と売れていく。その壁の向こうの見えない場所で、警備員や都職員が様子をうかがっている。

メガホンで客に声を掛けているのは、仲卸の村木智義さん。今回の処分を受けたうちの一人だ。

小池百合子都知事が昨年六月に「築地は守る、豊洲を生かす」と両市場を併存させる方針を示したことに触れ、「約束を守らず、築地の解体工事を進めている。八十三年続いてきた築地市場の文化と、俺らの生活の拠点を根こそぎ奪った」と険しい表情で語る。

築地で約九年修業した後、独立して二十年。築地には独自のブランドがあると信じている。「全国で飛び抜けて業者も取扱量も多い。その中で自分の店で買ってもらうのは大変なこと。目利き、魚の扱いや技術、サービスが高められ、築地ブランドになった。銀座に近いという立地もある」

村木さんは「長年、培ってきたのれんがある。俺らには築地で営業する権利がある。築地の存続は譲れない」と語気を強める。豊洲に店は出したものの、移転前より二、三割売り上げが減った。その店が処分でこの年末、営業できなくなった。

処分されたもう一人の仲卸は杉原稔さん（六四）。十八歳から築地で働き、独立して二十年。エビを中心に扱っている。村木さんとともに、「お買い物ツアー」に参加していたこともあった。「豊洲が築地よりいい市場だったら素直に移った」と語る。

水産市場では氷、水、海水が欠かせない。それなのに、豊洲の施設は貧弱だという。「必要以上に水を流すなと言われた。水使っちゃだめってあり得ない」。排水溝が浅く、ボルト締めされて掃除がしにくく、すぐに詰まる。築地より頻繁に掃除をしなくてはならないそうだ。

「今もベンゼンなど地下水の汚染が解決できていない。それなのに七月に都知事は安全宣言を出した。納得がいかないのに無理に行かせるなんてこんな理不尽なことがあるか」と憤る。

この二人に処分が通知されたのは十一月二十六日。十二月一日から三十日間豊洲市場での営業を停止するという内容だった。処分明けの三十一日は市場が休み。つまり年内は仕事ができなくなった。

仲卸にとって死活問題。杉原さんの店では十二月に普段の月の倍近い約一億五千万円を売り上げる。損失は取り返しようがない。

処分の理由は「築地市場の施設を原状回復しなかった」こと。平たく言うと、築地の時に使っていた仲卸の店から、期限までに荷物を運び出さなかったということだ。それは事実だが、二人は「処分は見せしめだ」と声をそろえる。他にも荷物を運び出していない業者があるからだ。

都の説明「築地に荷物」 他の業者は処分なし